

氏名	平 見 良 一
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博乙第3626号
学位授与の日付	平成13年9月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)
学位論文題目	Instability of Reference Diameter in the Evaluation of Stenosis After Coronary Angioplasty: Percent Diameter Stenosis Overestimates Dilative Effects Due to Reference Diameter Reduction (冠動脈形成術後の狭窄評価における対照血管径の不安定性: 内径狭窄率の対照血管径縮小による過大評価)
論文審査委員	教授 佐野 俊二 教授 大江 透 教授 横野 博史

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

冠動脈疾患の治療においては、冠動脈形成術（以下、PTCA）が治療の主流となっているが、その結果は冠動脈造影における病変部の内径狭窄率により評価されている。この評価においては病変部と、病変部にごく近い正常な対照血管径を比較する必要があるが、対照血管径はPTCAによって変化することはないとみられてきた。病理学的研究では、しばしば動脈硬化病変はび慢性に広がっていることが実証されている。さらに、ある実験研究は、バルーンによる血管拡張が、正常な冠動脈においても線維化を引き起こすことを明らかにした。これらの研究報告に基づいて、我々はPTCA後、少なくとも一部の患者においては対照血管径が変化するという仮説を立て、PTCA前、直後、さらに3ヶ月後の対照血管径の変化を検証した。結果、対照血管径はPTCA直後および3ヶ月後に有意な減少を示した。従来のPTCA後の対照血管径を基準とした内径狭窄率では症例によってはPTCAの拡張効果を過大評価することが判明した。したがってPTCAの効果判定には絶対血管径を用いた評価の方がより正確であると考えられた。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、冠動脈形成術（PTCA）後の狭窄評価について従来行われている内径狭窄率を再評価したものであるが、病変部周囲の対象血管径が症例によってはPTCA後減少するため従来の評価ではPTCAの効果を過大評価しているという重要な知見を示した。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。